

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会〔公開議題〕

議事概要

- 日 時 令和4年12月8日(木) 11:28～12:02
- 場 所 中央合同庁舎第8号館5階共用B会議室
- 出席者 上山議員、梶原議員(W e b)、佐藤議員(W e b)、篠原議員(W e b)、菅議員、藤井議員(W e b)  
(事務局)  
森総理補佐官、松尾事務局長、奈須野統括官、坂本事務局長補、渡邊事務局長補、井上審議官、覺道審議官、次田参事官、赤池参事官、松木参事官  
(文部科学省科学技術・学術政策局 研究開発戦略課)  
神谷課長  
(文部科学省科学技術・学術政策研究所 科学技術予測・政策基盤調査研究中心)  
伊神センター長  
(オブザーバ)  
橋本内閣官房科学技術顧問

- 議題 ・研究力を多角的に分析・評価する新たな指標の開発について

- 議事概要

午前11時28分 開会

○上山議員 それでは、少し15分ほど時間も押しておりますが、これから、第6期科学技術・イノベーション基本計画に基づいて、研究力を多角的に分析・評価するための新たな指標の開発について、昨年度御議論いただいた研究力の整理に基づきまして、試行的に具体化・収集した指標の内容について、公開で議論を進めたいと思います。

本日は、文部科学省の関係部局からも関係者に御出席いただき、研究力を多角的に分析・評

価する新たな指標の妥当性や今後の取組等について議論を行いたいと思います。

まず、それでは、内閣府の科技事務局から説明をお願いいたします。

なお、質問、意見交換は全ての説明が終わった後に取りまとめて行いたいと思いますので、御了承ください。

では、内閣府の科技事務局より、松木参事官、説明をお願いします。

○松木参事官 内閣府科技事務局、研究環境担当参事官をしております松木です。

それでは、資料1に基づきまして、研究力を多角的に分析・評価する新たな指標の開発について、まず御説明をしたいと思います。

資料1の3ページ目を御覧いただきたいと思います。

そもそもどういう位置付けなのかというところから御説明をさせていただきたいと思います。

第6期科学技術・イノベーション基本計画、令和3年に定められました閣議決定ですが、この中で、下の○にありますような記述がございます。「我が国の研究力を多角的に分析・評価するため」と言って、最後の方に行って、新たな指標の開発を2022年中に行いますということが書いてある訳です。

問題意識といたしましては、よく我が国の科学研究力については、トップ10%論文数、被引用論文数は、例えば韓国、スペインに抜かれて12位になりましたといったような形で、よく論文のことが引かれて、我が国の科学技術力は低下したというふうに言われることが多いのですが、科学研究力の評価というのは、そもそもそのような論文だけで本当にやってしまっているのかといったような問題意識がございます。それについて、もっと多角的な評価指標を立てて評価していくようなやり方を考えるべきではないか。このような問題意識が背景にありまして、この第6期基本計画にこのような記述が盛り込まれたと。

2022年中ということなので、少しぎりぎりになって申し訳ないのですが、今月というのがリミットになっておりまして、それで議論をさせていただきたいというのが本日の議論の位置付けです。

時間が押しているということですので、少し飛ばしながらです。

9ページ目を御覧いただきたいと思います。

こちら、昨年12月の評価専門調査会などで私から御説明をして、中間まとめ的に御報告をし、オーソライズされている方向性です。多角的な評価指標を立てる際には、三つの指標群を立ててはどうかという御提案をしている訳です。

まず、一つ目は科学研究指標の指標群です。これは、トップ10%論文を含む論文に関する

様々な指標を集めたグループということです。

二つ目は研究環境の指標群です。こちら、ダイバーシティから研究時間から様々な、研究環境に関する様々な指標を集めてはどうかという二つ目のグループということになります。

それから、三つ目がイノベーション創造関連指標の指標群です。こちらは、トップとかサイエンスリンケージとか、そういったイノベーション創出に係るものを集めてはどうかと。

この三つで指標群を構成して、それぞれのパフォーマンスを見ていくやり方はどうかということ、一応この検討の方向性として御了承いただいたと。

その後、私ども事務局の中で、色々な有識者の意見を聞いたり、色々なものを参考にしながら、それぞれの指標群を構成する指標として何がふさわしいかといったようなことを検討してまいりまして、本日お示ししたいということです。これについて御議論いただきたいということです。

少し時間が押しておりますので、また飛ばしますが、まず、一つ目の指標群です。16ページ目を御覧いただきたいと思います。16ページ目ですね。

これが、論文を中心とする科学研究指標群の考え方ということです。

ここで、緑の字で書いてあるのが、第6期科学技術基本計画に既に何らかの形で記載があるものです。赤字は、今回新しく提案する、新しく付け加える要素ということになります。

まず、論文については、総論文数の国際シェアとか総論文数などの量的なもの。それから、トップ10%論文という質のようなものに加えて、そのトップ10%論文の国際シェア、厚み的なもの。それから、非被引用数指標としてNature Indexといったものも取り込んでみてはどうかと。これは、御存じの方もあるかもしれませんが、Nature Indexというのは、「Nature」が世界の一流の研究者から、あなたが超一流の科学雑誌だと思えるものは何かということを知って、82の超一流雑誌を厳選したものということです。そこに載っている日本人研究者の論文の数はどうかといったようなことを見る指標を加えてはどうかという御提案です。

それから、論文ではないのですが、重要なものとしてプロシーディング。下にございます国際会議の発表原稿のようなものです。これは、特定の領域におきましては、査読を経た論文を見るよりも、プロシーディングを見た方が当該分野の活性具合を見ることができるといったようなものがあります。代表的なものは、次のページにも分析しておりますが、AIです。ただ、AIだけではなくて、ほかの領域もこれあると思います。こうしたプロシーディングを見た方がよいというもの、領域についても順次分析をしていって、こうした指標、この指標群に入れ

てはどうかという御提案です。

それから、プレプリントです。これは査読前の論文です。これについても様々少し議論がありますが、例えばCOVID-19のような、今現在進行形で、どれぐらい日本が論文のパフォーマンスが出ているかといったようなものを、もう査読を待たずに取りあえず見てみたいといったような場合には非常に有効なものです。そういったこともあるので、可能性としては、これも是非将来的には取り込んでいきたいと思っておりますが、引き続き少し検討させていただきたいという位置付けにさせていただきます。

それから、日本語論文ですね。これも是非この指標群に取り込んでいきたい。まだ少し中で調整中ですが、方向性としては、これも取り込んでいきたいと思っております。こちら、人文・社会科学系の論文では、特に英語にならない論文って多いと思います。人文・社会科学系をきちんとパフォーマンスを取っていかうと思えば、やはり日本語論文も追っていく必要があるだろうということで、これも科学研究指標群に入れてはどうかという御提案です。

それから、また少し飛びまして19ページ目、御覧いただきたいと思いますが、これが二つ目の指標群です。研究環境指標群ですね。

ここが一番、我々検討しております非常に難しかったところです。研究環境を、主に研究者に係るものと、予算・設備に係るもの、それから下の方に行きまして、研究への意識に係るものという形で入れ込めはどうかという御提案です。

研究者に係るものとしては、研究者数。これは、研究者のそのまま数ということもありますし、支援者数とか、博士号取得者数みたいなものもひっくるめて、研究者の数に係るもの。それから、研究時間に係るもの、給与に係るもの、国際化の程度に係るものといったものを入れてはどうか。

それから、予算・設備。右上に行きまして、予算と、それから、設備と申しますのは共用化の割合などを入れてはどうかと。

それから、下の方の研究への意識です。これについては、研究者の意識については、NISTEPが定点調査を実施しております。また、国民の意識についても調査をしているということです。

これ、なぜこうしたものを入れたかといいますと、予算とか、例えばですが、予算はかなり科学技術関係予算増えている訳です。ただ、定点調査をしてみると、実はそこまで増えたという実感が研究者が持っていないといったような乖離があると。客観と主観部分の乖離があるということです。これは、それだけに限りませんが、こうした、本来そのような乖離、つまり、

客観的な部分をよくして、かつ、現場の受け止めもとてもよくなったって感じてもらったときに初めて研究者はインセンティブを持って、そこで初めて研究環境がよくなっていくといった部分もあるのかなと思ひまして、こうした主観的なものも入れてはどうかという御提案です。

これが二つ目のグループでして、21ページ目を御覧いただきたいと思ひます。三つ目のグループとして、イノベーション創造関連指標群です。

これについては、実は非常に赤字が多いのですね。第6期基本計画では、意外とこの緑の部分少ない訳ですが、ここに色々補強いたしまして、例えば共同研究の実施件数とか、特許についても実施件数・収入額、それから、サイエンスリンケージとしてパテントファミリー数、それから、最近重要というふうに声を聞き始めております地域貢献、こうしたものも、地域の中小企業との共同研究などといったものも入れていくと。それから右下はスタートアップに関連するもの、ベンチャーの数とかIPOの件数などを入れていく。こうしたもので三つ目のイノベーション創造関連指標群を構成してはどうかという御提案です。

以上、三つの指標群、分ける訳ですが、23ページ目、これ、関係性を整理したものです。

政府が直接頑張って働きかけられる対象というのは、恐らく研究環境指標群の部分だと思ひます。ここが改善されることを経て、科学研究指標群が上がっていくと。それが更にイノベーション創造関連指標群につながっていくという関係性なのかなと。

こうしたことを考えたときに、例えば政府としての目標値の立て方として、最初に申し上げたトップ10%論文数をこれだけ上げましょうという立て方が本当に妥当かどうかということ、やはりよく考える必要があるのかなと。それが妥当かどうかということですね。

それよりも、むしろこうした指標群ベースで、それぞれの指標群のパフォーマンス値を上げていくといったような、ある年を基準年として、そこから上げていくという目標の提示の立て方の方がいいのではないかとといったようなことも少し考えております。

今、例として申し上げた基準年を1としたときにどうなるかということですが、26ページ目、御覧いただきたいと思ひます。

こちら、非常にラフなのですが、各指標群を構成する指標それぞれについて、基準年を2016年、1といたしまして、各年をはじき出したものです。重みづけを全く考えずに、相加平均だけで出しております。そうすると、科学研究指標の合成指数の場合は、2016年から2020年、下がっていると。研究環境は横ばい。イノベーション創造関連指標は右肩上がっていますといったようなことができます。

これを、例えば第7期の基本計画のときに、これは議論が必要ですが、同じようにこうした

基準年をベースとして挙げるということが出来るかどうかということも、検討の余地があるのかなというふうに考えております。

今後、今回は色々検討を重ねて、各指標群に属するべき指標としてふさわしいものは何かということを我々の方でも考えたのですが、先ほど少し申し上げたとおり、第7期の基本計画、これは2026年から5年間でスタートします。あと3年あるというふうにも考えられますが、実はもうあと3年しかない訳です。そろそろCSTIとしても次の計画どうするかということを考えなければならない時期にかかっていると。そうしたときに、この指標群、三つで指標群を構成してパフォーマンス値を見ていくといったような形を、あと3年掛けてモニタリングを重ねながらよりよい指標を、この指標群に今入っているやつが実はふさわしくないから落とす、代わりにこれを入れると、逆にこれを追加するといったようなカスタマイズをしながら、今後、モニタリングをしていって、第7期の基本計画の議論にうまくつなげられたらなというふうに思っているところです。

私から説明は以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

これから全般的な自由な御意見ですが、今日は文部科学省の科学技術・学術政策局研究開発戦略課及び科学技術・学術政策研究所の関係者にも御参加をいただいておりますので、現状や今後の検討の方向性について不明な点があれば、御遠慮なく御質問を、御意見をお願いしたいと思います。

私の方から簡単に最初に、研究者の意識の問題がとても大きい、研究環境の問題が非常に大きいということの指標の中で、研究者あるいは国民の意識をどう拾っていくかという話。これはNISTEPの方でずっと定点調査を色々な形でやっておられますが、今回出てきたような指標というのは、まだ拾い上げられていないものもございますよね。それは今後やはり、この定点調査の中で考えていただきたいなというふうに思っておりますので、それだけ一言。

ありますか。伊神センター長、何かありますか。

○伊神センター長 御指摘ありがとうございます。

今の定点調査も第6期基本計画をベースにしておりますので、研究環境という意味では、一部は含まれておりますので、まず、その部分で何か変化の兆しがないかというのをしっかり見つつ、全くない視点というのは、定点調査自体、固定した回答者に固定した質問なので、第7期に向けて検討していくと。

ただ、それに加えて深掘り調査というものをやっておりますので、これは毎年二、三問とい

うことで、少し厳選はしないといけないのですが、先生の問題意識等も踏まえて、なるべく御活用いただけるようにしていきたいと思います。

○上山議員 ありがとうございます。

では、我々の方で準備しました、この新たな第7期に向けての指標群ということで御提示させていただきました。御質問、御意見ありました。

今いただいているのは、最初は藤井議員と聞いております。藤井議員、どうぞよろしく願いします。

○藤井議員 ありがとうございます。

私からは、大きくは三つですかね。

一つは、今の研究環境の指標で、定点調査なさっている訳ですが、その調査と、この研究環境でいう予算とか設備、つまり、予算とか設備は、それぐらい予算が付いているか、設備が整っているかという。そのサービスを提供する側の指標はもちろんあると思うのですが、やはりサービスを受け取る側というのでしょうかね、研究者側の視点に立ったときに、例えば設備へのアクセスが十分であるかとか、十分な予算確保できているか、あるいは十分な処遇を受けているかといったような、ある意味、受け取る側の視点というのでしょうかね、その辺りがうまくひもつけられるのかどうかというのが一つの御質問です。

それからもう一つは、サイテーションとか論文の、最初の科学研究指標ですが、これは一つ大事なことは、新しい研究分野を創り出す、生み出していくということが、これはある意味、科学者にとっても非常に重要であります。これは、論文をぼんと出せばいいという話ではなくて、例えば国際会議であるとかそうしたものをオーガナイズして、コミュニティ作りをしていくというのが極めて重要な訳ですね。なのですが、その辺りのアクティビティをどうやって測ればいいのかというのは、中々まだ確立できていないところがあるのではないかというふうに感じています。例えば、そうした国際会議の主催の数とか、そうしたことでもいいのかもしれないませんが、その辺りは検討。これは、ですから、日本の研究者がある意味世界をリードしていく、あるいは世界の中で特定の領域をオーガナイズしていくという意味で、非常に重要な指標になり得ると思いますので、どういうやり方があり得るかということのを是非御検討いただければいいのではないかというふうに思います。

それから、プロシーディングス関係ですが、実はこれ、もう研究者の中では明らかに、あそこのプロシーディングは非常にハイインパクトであるというの、もう分かっているものというのは結構ありますので、これもむしろNature Indexに近いのですが、やはり研究

者間のコミュニティの中で、もう明らかにあそこに出てくる、あるいは、あそこに出すのがみんなは目標にしているというものは、もう幾つか代表的なものがありますから、そうしたものを少しリストアップしていくということはあってよいのではないかというふうに思いました。

私から以上です。

○上山議員 松木参事官、今のはありますか、何か。

○松木参事官 私が説明で申し上げましたとおり、実はこれが完璧な姿でスタートするというものではございません。まだまだこうしたものを取り込んだ方がいいというもの、例えば論文の質とか新規性とか色々なものを考えて、でも、今は取りあえずこれでスタートしようという位置付けのものでありますので、御指摘を踏まえまして、どういったものが指標群に追加できるかなどは、モニタリングをしながら、また考えさせていただきたいというふうに思っております。

○上山議員 ありがとうございます。

それでは、次は佐藤議員、よろしく願いいたします。

○佐藤議員 ありがとうございます。

3点ほどあるのですが、一番難しいのは、この研究環境指標の考え方のところが一番難しいのかなということでお聞きしていたのですが、特に研究時間のところは、我々今までも機器の共有化とか、あるいは事務人材の問題、URAの問題とか、データの利活用の問題等で議論してきた訳ですが、この研究時間のところの記述、これから詰めていく訳ですが、せっかくあそこまで詰めてきたので、定量的な形で何らかの指標を作るという方向にしていくべきなのかなというふうに思います。

それから、給与水準のところはとても問題意識があって、これだと、給与水準が上がればいいというふうな形に持っていくつもりで給与という項目が出てくるのですが、もう少し給与水準については細かい価値観、位置付けてものを議論した上でということにさせていただいた方がいいのではないかというふうに思います。

それから二つ目は、21ページのところに関わるのですが、第6次基本計画の中の目玉は、私は総合知とそれから社会実装だと思っているのですが、社会実装化という問題を何らかの指標として位置付けるということで6次計を評価すると、それが次の7次計につながっていくという橋渡しの大きな一部だと思っているので、社会実装化というものを指標化すること、これは言うのは簡単ですが非常に難しいことは承知の上で、そうした視点で検討してみるということも必要ではないかと。

あるいは、総合知というものは様々なプロジェクトで実際の実例を見ていこうということに



なっているのですが、それについても、どこまで行ったのか、7次計でどこまで行けるのかと  
いうことを繰り返せるような、これもまた難しいのですが、指標的なものがあったらいいの  
かなというふうに感じました。

最後に、26ページの右下の「想定される課題」というところを私読んでいて、正にこの  
とおりだなと。全部難しいですね。ただ、やはり科学的な分析ということで、この課題とい  
うところを何とかして定量化してクリアしていくということが、恐らく次の計画に向けても非常に  
重要なことなのかなというふうに思っています、これから議論させていただければというふ  
うに思います。

私から以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

先にまずは、梶原議員も手挙がっているみたいですので、御意見等、御質問等いただいてか  
ら少しやります。あとは橋本科技顧問は終わりましたから。

○梶原議員 すみません、ありがとうございます。

いわゆる研究力とかそうしたのを何で測るか、論文だけではなくということに、割とどうい  
う新しい指標を見ていくというところで、こうした新しいグルーピングをしていただいたらと  
いうの、非常に興味深いなと思って見ておりました。

特にイノベーション創造関連指標ということで、先ほど、佐藤議員も社会実装ということ  
をおっしゃっていらっしゃいましたが、イノベーションについてどういう指標で見ていくのかと  
いうところで、トライアル的な分析例で、2016年に比べて右肩上がりしているというところ  
もある意味興味深く見ておりました。継続的に、どういうことが本当に見えていくのか。そ  
れから、先ほど、重みづけはしていないって形もおっしゃっていましたが、そういった中での、  
何をやるとより効いてくるかというところも見えてくるのかもしれないと思ったので、継続的  
にモニタリングしながらプロセスを回していただけるとよろしいかなと思いましたので、  
コメントです。

実際に入っているのだと思うのですが、URAですとか、技術職員ですとか、あるいは地域  
と大学をつなぐようなコーディネーター人材という、そういった方々の、一言、支援人材ってこ  
とで入っていらっしゃるので、全部そこで包含されていると思えるのですが、そうした研究力  
を支える人たち、あるいは社会実装を支える人たちというところの観点の数字といいたし  
ょうか、その動向もしっかり把握していただけるとよろしいのではないかと考えて見てお  
りました。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

じゃ、橋本科技顧問。

○橋本内閣官房科学技術顧問 簡単に2点申し上げます。

1点目は、研究力、イノベーション力も併せてですが、御存じのように、EUで新たな指標作りをやって、最終的に取りまとまりつつあるような状況なのですよ。この前、京都であったSTS会議のときにEUの閣僚級会合の場で、上山議員も出ておられたから覚えていると思いますが、私の方からこの指標の問題について少し出したら、わーっとみんなが手挙がって、すごい勢いで言ってきたのです。それは、彼ら今、必死にここの新たな、要するに論文だけではない、新たな指標を作ろうってことで必死になっていて、仲間作りをしようとしているのですよ。これ、実はアメリカとの引き合いで、イギリス、アメリカ、EUとの引き合いの中で、日本をどこに引き込もうかって思っている部分もあるのだなというの、その後分かったのですが。ただ重要なことは、とても今議論が進んでいるところなので、やはりそこの情報交換しながらきちっとやっていくということが大変重要かなというふうに思いました。これは今最もホット 이슈の一つですので、日本だけが独自に行くというのではなくて、しっかりと国際的な枠組みの中で見ることが重要だと思います。これは1点目です。

2点目は、あえてここで申し上げますが、第6期のとき、現状の科学基本計画作ったときと、科学技術・イノベーション計画を作ったときと今、大きく状況が変わっているのは、経済安保の問題であり、それから、安全、防衛力強化の中の文脈において、科学技術の重要性が明確に位置付けられたことです。これは、今までそうしたところは文脈の中に入ってこなかったといえますか、あえて触ってこなかったと言う方が正しいと思うのですが、しかし、それ以降、ここ2年間ぐらいで完全に世の中の状況は、議論は変わりまして、繰り返しですが、科学技術力というのが国家の重要なイシューとして明確に位置付けられている訳です。それは、個人として参画してもらって個人としての貢献の部分と組織としての貢献の部分の両方が、これ、読んでいただいたら分かりますが、両方も明確に位置付けられます。そうすると、その部分の評価をどうするのかということなしで総合科学技術・イノベーション会議のモニターにはならないですよ、絶対。なので、これ、大変難しい問題だけど、でも、それはそうした問題が、そこに対して組織としても個人としてもコントリビューションしていくってことは国家から求められてきたって、そうした社会的要請がある中において、こうした指標をどのように決めていくのかってことをやはりきちっと、今日あえて、公開だから私申し上げますが、そうした

ふうには社会の状況が、国として要請があるという中で、科学者コミュニティがどのようにそれに対して貢献していくのかということを示す、あるいは、どれだけしているのかということを示すということは、これは絶対に必要ですので、その部分をこの指標の議論から外すことはできないので、是非そこは正面から取り組む必要があると思う。

しかし、微妙な問題をたくさん含んでいますから、非常に丁寧にやっていく必要もあると思いますので、アップどおりに上からただ言えればいいというお話ではありませんので、是非そのことは今後の重要課題として指摘しておきたいと思います。よろしくをお願いします。

○上山議員 ありがとうございます。

様々な御意見いただきましたが、今これ提示しているのは飽くまでたたき台ということでありまして、例えばプロシーディングの分類をもっとすればいいのではないかとか、あるいは、佐藤議員のおっしゃった総合知と社会実装化、これ、第6期のテーマなので、それについて深掘りするような指標。総合知は非常に難しいと思いますが、社会実装化に関しても、今少し少しずつレディエンス【★00:28:44】レベルということでやろうとしているということだとは思いますが、支援人材のこともお話しされたと思う。

それから、今、橋本先生がおっしゃったようなことというのは、実は結構シリアスに考えております。私も、EUあるいは特にOECD、かなりのところでやっておりますが、どんどんどんどん進んでいて、社会的なインパクトをどうやって測っていくのかということも含めて、指標作りをかなりやっています。それは各国共通した関心だと思いますので、そこへきちんと手を組んでやっていきたいと思っておりますし、経済安全保障、この問題はおっしゃるように避けて通れないとは思いますが、ただ、これを指標化していくまでいくのは、かなり丁寧なコンセンサスの下にやらないといけなと思っています。今回も、学術会議に対する第三者委員会みたいな話もぼーんと出てきましたし、今日は梶田議員はおられません、個人としてどう関わるのか、組織としてどう関わるのかということが問われていくことは間違いないと思っておりますが、やはり重要なことはコンセンサスベースでやっていくべきだなと。そこのところを丁寧に御説明をしながら、紀要作りは研究力のところでやっていきたい。

文部科学省の人たち、何かありますか。

○神谷課長 すみません、今の時点では我々も特に具体的なこと考えておりませんが、是非連携協力して、何かできることあればやっていきたいというふうには考えております。

○上山議員 現場のことをやはりきちんと入れていくためにも、文部科学省の情報を丁寧にフォローさせていただいて、一緒に議論させていただきたいと思っております。

○神谷課長 是非よろしく願いいたします。

○橋本内閣官房科学技術顧問 OECDとかEUとかのあそことも、OECDとかEUとかとは具体的に少し進めていただいた方がいいと思うのですよね。彼らは非常に一緒にやりたいというふうに言っている訳だから、是非。

○上山議員 これはね——赤池参事官、いる——我々のところ、結構はやっているのです。

○橋本内閣官房科学技術顧問 やっていますか。

○上山議員 うん、やっているのです。

○橋本内閣官房科学技術顧問 じゃあいいです、はい。余り、それほど反映している感じもしなかったのです。

○上山議員 いや、結構。

○赤池参事官 はい、少しだけやっています。実は、OECDが全体的な基準を作って、そこにバイで色々入ってくるというのが、この指標の世界の構造です。EUも非常に大きいし、アメリカも非常に大きな、特にイギリスが非常に大きな影響を持っていますという構造があります。

実はNISTEPから、伊神センター長も言っていたのですが、OECDの統計の事務局に継続的に人を出しています。

一つだけ、今少し興味深いプロジェクトを紹介させていただくと、お金の流れというのは、予算から始まって、ファンディングエージェンシーとか大学に行って、最後、研究者に行くって、こう流れていくのですが、今のシステムって上流と下流だけしか国際基準で把握できないので、その流れがどうなっていくかというものを例えば見るとかという、マリアット【★00:31:33】というプロジェクトなども今進んでいます。これなどは今、内閣府も文部科学省もNISTEPとかも協力しながらやっていたりとか、あと、民間企業の指標もそろえていこうなんてことも色々やっています。

バイとマルチと、先生おっしゃるとおり、色々な組合せでやっていくことが大事だと思いますので、是非、関係府省、NISTEP、RIETI等も協力しながら、積極的にやっていきたいと考えて、JSTさんも是非よろしく願いします。

○上山議員 もう分析に関する研究者も色々な国際会議のところに出ていってもらって、情報交換をしながら、我々の考え方と国際的なところの考え方というのをすり合わせる作業は、結構丁寧にやっている。

○橋本内閣官房科学技術顧問 分かりました。

私が気にしているのは研究成果の評価のところ。ここがやはり一番、研究者が気にし、それから、微妙なところですよ、色々な意味でね。それはやはり国際的な協力機関のコンセプトの中でやっていくってことが、納得感も非常に高いので、納得感は研究者にもそうだし、行政に対してもそうだし、その辺をしっかりとやっていただきたいなと思います。

○上山議員 ありがとうございます。

では、今後も、この一番考えていることは、第7期に向けた、やがてレビューが始まるという。そのときのレビューを丁寧にやらないと第7期が中々うまくいかないのではないかという気がいたしますので、この類いの研究力の把握等々については、事務局の方でまた頑張ってくださいと思います。

それでは、そろそろ時間となりましたので、これで終了とさせていただきます。

本件については、本日いただいた御意見も踏まえて、内閣府科技事務局や文部科学省において、第6期科学技術・イノベーション計画の達成の評価、それから第7期に向けてのモニタリングと改善という形で議論を続けさせていただきますので、また今後とも御意見いただきたいと思います。

ありがとうございました。

午後 0時02分 閉会